




審査結果の要旨

報告番号	乙 第 2888 号	氏名	今村 陽平
審査担当者	主査	高橋 繁思	(印) 
	副主査	高森 信三	(印) 
	副主査	藤本 公則	(印) 
主論文題目 : Prognostic value of SUVmax measurements obtained by FDG-PET in patients with non-small cell lung cancer receiving chemotherapy (化学療法を施行する非小細胞肺癌患者における FDG-PET の SUVmax 値と、生命予後との相関に関する検討)			

審査結果の要旨 (意見)

本論文は非小細胞肺癌の予後予測について FDG-PET の役割を評価したものである。SUVmax 値を 6 でカットオフ値を設定した場合に治療後の予後に関連することを示している。2010 年に発表されたものであり、数多く引用され、評価の高い論文でもある。一方、近年の癌治療の進歩は早く、様々の治療法が開発されている。それぞれの治療法ごとに予後予測方法の確立が必要であり、特に画像診断、遺伝子診断、生化学検査などのバイオマーカーが適切に活用されることが重要である。無駄な治療が行われる事なく、効果が見込まれる治療法を選択していくことは患者のためには勿論、医療資源の適切な利用という点からも重要である。本論文は限られた条件下ではあるが、PET 検査における SUVmax を予後予測に用いることができる可能性をさきがけて明らかにした点で優れており、学位論文として適切であると考えられる。今後は PET 装置の進歩に伴う変化や過去のデータをさらに経時的に観察を加えた研究を推進していただきたい。

論文要旨

FDG-PET は現在、悪性腫瘍の病期診断において重要なツールである。ほとんどの悪性腫瘍は、正常組織よりもはるかに高い細胞増殖能と、グルコース代謝能を有していることから、FDG の取り込みは高い。FDG-PET で病変の集積程度を表すために、投与した FDG の量に対する局所の集積の比 SUV (standardized uptake value) を用いるが、病変への FDG 分布は不均一であるため、最も集積が高い部位の値 (SUV 最大値: SUVmax) を用いている。今回、我々は SUVmax および他の臨床因子との関係を分析し、SUVmax が化学療法を受けた非小細胞肺癌患者の無増悪生存期間および全生存期間を予測できるかどうか検討を行った。組織と SUVmax において adenocarcinoma では、その他の組織型に比べて SUVmax が有意に低いことが分かった。SUVmax 6 を cut off 値として Progression Free Survival、Overall Survival 共に有意差を認め、SUVmax の値が生命予後に関係している可能性が示唆された。